

安心して暮らせるまちづくりのために

栄・防災ボラネット通信

発行：横浜栄・防災ボランティアネットワーク

27号
2018-11

2018年度 第2回研修会 開催案内

災害時、災害ボランティアセンターや地域防災拠点、行政等がどのように連携し合うのか、相互の意見交換を通して理解を深めるための研修会も今年で3年目を迎えました。

今年7月の拠点運営委員会 意見交換会で頂いた多くのご意見も参考にして、栄区の防災組織の連携について話し合う機会にしたいと考えています。

すぐには解決につながらなくても、災害についてみんなで考え、私たちの栄区を災害に強い栄区にしませんか？ みなさまのご参加をお待ちしております！

クロストークⅢ「災害時の連携にどう備えるか」 ～ 地域とのつながりを目指して～

日時 12月8日(土) 13時30分～16時
場所 栄区役所 新館4階 8・9号会議室
対象 地域防災拠点関係者、防災に興味のある方

1. 地域防災拠点について…栄区役所 危機管理担当係長 伊藤 徳経
映像でみる、拠点開設訓練・拠点を開設するためにはなど
2. 災害ボランティアセンターについて…栄区社会福祉協議会
災害ボランティアセンターとは、何をするとところ？など
3. クロストーク（意見交換）



第1回 (2016.12.10)



第2回 (2017.12.9)

主催：横浜栄・防災ボランティアネットワーク 栄区社会福祉協議会 後援：栄区役所

※当日、直接会場へお越しください。

第13回 災害ボランティアセンター 開設・運営訓練のお知らせ
・日時 2月12日(火) 9:00～12:00 ・会場 栄図書館・社会福祉協議会

○区役所防災講演会 「避難所の理想と実態」

講師： 佐藤一男氏（一般社団法人危機管理教育研究所）
日時： 2018年9月27日（木） 14:00～15:30
場所： 栄公会堂
参加： 約200名、 ボラネット： 役員・会員 多数参加

講師の佐藤さんは牡蠣筏を持つ漁師、消防団員であり防災士、両親と共に7人家族で岩手県陸前高田市に住み、東日本の地震発生時には港外の筏に向かっていた。船の揺れで地震に気づき港に取って返して従業員に渋滞を避けての避難を指示。自分も家族を急き立て、かねて緊急時の避難先と決めていた高所の叔父の家に。一時中学校の避難所に集まったが、安全を求めてより高所の小学校に避難者全員で移動した。

主題はここで過ごした生活の中で、避難者にとって、また避難所運営に際して生じた問題事項を感謝の念を陰に置きながら取り上げ、避難所の環境をより良くするための提案として話された。



講演の中のいくつかの項目について例を挙げます。

【1. 避難所の運営】

平時の生活で「長」がつく人にまず指揮を執ってもらうが、避難者全員が子供たちも含めて役割をもって生活。消防団の不明者捜索活動で所長の団長が抜けた後を佐藤副団長が継ぎ、町のお祭りの役割で運営の役員を決めた。役員心がけは、①支援物資は見えるところに、②役員は物資を先に取らない、③決めごとの説明は全員揃う場で(昼間は復旧作業で外に出るので、夜になる)、④持ち物の差(充電器など)を作らず共同使用、運営の注意には、食事よりもトイレの設置を第一に、長期化に応じて食中毒・伝染病の予防、寒い時期にノドの保護マスク、などの配慮も行った。

【2. 要支援者への対応】

避難時の支援は重要だが、避難所での生活支援を別途考える必要がある。「女性」「LGBT」「宗教・宗派」さらに細かくは「精神障害者」「妊婦」「乳幼児」「外国人」での差別をなくし、LGBT者のためにトイレ(多目的トイレ)と風呂についても配慮した。

【3. 避難所生活で困ったこと】

災害直後「寒さ」、その後の「暑さ」、避難生活の環境改善として「バリアフリー」「プライバシー」(体育館での仕切り、男性トイレのプライバシー)「入学時の制服」(被災直後の4月の入学式に)。

【4. 減災は誰が取り組むのか】

住まいは安全な場所か、地震でケガをしない準備は、安心して避難できるか(ハザードマップ・福祉避難所)、避難者に必要なもの(物・支えあい・環境)など具体的に再考を促される解説でした。

<感想>

陸前高田市の人口は約19,300人、7,600世帯で、22か所の二次避難所、8か所の福祉避難所が設定されていて、二次避難所は避難者の自主運営に任されています。横浜市の避難所(地域防災拠点)には運営委員会がありますが、実際の避難生活は避難者の自主性と支えあいで運営していくことが必要です。この意味で佐藤さんの講演内容は大いに参考になると思います。

なお、佐藤さんが寄稿された「東日本大震災、体育館避難所で起きたこと」の文は下記のURL①に、その後日談として執筆された「東日本大震災、仮設住宅に移るまでに起きたこと」がURL②に掲載されて、避難者の心情、支援者の真心などが事細かに記されています。ご参考までに。

URL①：<https://synodos.jp/fukkou/14462> URL②：<https://synodos.jp/fukkou/15020>

宇都宮(記)

<活動報告>

○第 14 回災害ボランティアネットワーク Bブロック会議報告

日 時： 2018 年 10 月 16 日（火） 18:30～20:15
場 所： 戸塚区社協障害者支援センターフレンズ戸塚
参加者： 25 名

（金沢区 1 名、港南区 8 名、磯子区 3 名、戸塚区 8 名、栄区 4 名、市社協 1 名）

市社協障害者支援センター課長田中一樹氏による「平成 30 年 7 月豪雨災害における災害ボランティアセンター運営支援報告」が行われました。横浜市社協では 18 名が被災地（広島県三原市）に派遣され、災害ボランティアセンターの運営支援にあたったこと、活動の内容や気づきとしてのエピソードなどをうかがいました。その後 3 つのグループに分かれ意見交換を行いました。人口の多い横浜でのボラセン運営をどのようにするのか、日頃からそれぞれの役割や地域とのつながりが重要であるとの確認がされ、各区近況報告による情報交換を行いました。

次回は栄区が担当となります。平成 31 年 2 月 19 日 18 時 30 分より栄区福祉保健活動拠点ピアハッピー栄で行われます。

藤田（記）

○防災講座協力

① 長倉町自治会防災部会 意見交換会「自治会の防災力・受援力」

日 時： 2018 年 5 月 26 日（金） 15:00～17:00
場 所： 長倉町 自治会館
参加者： 長倉町自治会 防災部会 約 20 名、 協力者：宇田川、藤田、宇都宮(記)

「自治会の防災力・受援力」をテーマに、防災に関して活躍されている方々との意見交換会。「受援力」に相当する事項に かねてから高い認識を持って実践されている長倉町の皆さんの強い熱意も感じられ、意義のある時間を持つことができました。

自治会の防災体制や自治会防災部の機能、安否確認の実施方法、にも地域の特色があること、要援護者の把握も「手上げ方式」を更に進める段階にあり、地域防 災拠点との連携も十分、今後は災害ボランティアセンターに関しても理解を深めていただくための交流を進めることも必要と感じました。

②小菅ヶ谷西谷戸町内会「防災訓練」

日 時： 2018 年 11 月 11 日（日）
場 所： 小菅ヶ谷西谷戸町内会 小菅ヶ谷 4 丁目公園
参加者： 町内会会員 100 名 協力者：菊地、藤田、福森、大森（記）

小菅ヶ谷西谷戸町内会の防災部より依頼を受け、小菅ヶ谷 4 丁目公園で開催された防災訓練の一部として、①防災グッズの展示と説明 ②非常用炊出袋を使って炊飯とホットケーキ作りのデモに協力しました。約 100 名の参加者は、訓練内容の説明を聞き、ラジオ体操を行い A・B の 2 班に分かれて炊き出し訓練（カレーライスとみそ汁）、トイレ対策・スタンドパイプ式消火器使用訓練（栄消防署の指導）と私たちのブースへ順次参加する形でしたが、防災グッズの展示・説明には大変熱心に耳を傾けてくださいました。また、ホットケーキ作りには子どもたちにも参加してもらい、炊きあがったご飯と共に試食していただきましたが大変好評でした。また、こうした準備の必要性をしっかりと感じてくださったように思いました。



会員紹介

現在、災ボラの会員数は、個人会員 44（家族会員は 4）、団体会員 31 となっています。会員の防災への取り組みをご紹介します。

◆たんぽぽの活動

たんぽぽ代表：大森真由美

平成元年 2 月にスタートした「たんぽぽ」は来年 2 月に満 30 年になります。メンバーの高齢化に伴い、現在行っている活動の継続が難しくなって来ている等の理由で、30 年度でグループは解散することとしています。ただ、会員の多くは他の様々な活動に参加していますので、それぞれが自分なりの活動を続けていただけるものと思います。

さて、栄・防災ボラネットには設立当初から団体として参加し、多くの学習内容や体験をグループに還元してきました。災害ボランティアセンター開設訓練に障害のある多くのたんぽぽメンバーと共に参加したこともあり、関心を高めることができました。

その他、次のような防災関連の活動を行ってきました。

- ①パワーポイントによる防災講座
- ②社協と共同で防災訓練
- ③防災グッズの紹介・配布と販売（100 円グッズ、ヘルメットなど）
- ④会報「綿毛」に防災関連記事を掲載
- ⑤独自の緊急カード作成

近年の自然災害は、その規模や被災状況が目に見えて拡大しています。まずは、自分自身の命を守ることを第 1 に考えて準備をするよう再度会員には伝えたいと思います。



「被災地で得た諸教訓を将来首都圏超巨大災害に備える」

神奈川災害ボランティアステーション 鈴木幸一

私の災害ボランティア活動の原点は過酷な「被災地支援体験」にあると思う。「東日本大震災」では神奈川県赤十字防災ボランティアとして「日本赤十字社神奈川県支部」から「石巻赤十字病院」等三度被災地に派遣されたが、我が子を探す父親など想像を絶する被災地で見聞きしたものからは、現状を直視し「人間としての良心」へと目覚め、今後の進むべき道が決まった。

「神奈川」の名称は、「阪神淡路大震災」の当時、朝日新聞の投稿に「地図でしか見たことの無い地名を冠した消防自動車の走る頼もしさ(趣旨)」とあったことから、自家用車(キャラバン)に名称を記した。熊本地震では「赤ちゃんに飲ませるミルクを作る飲料水が無い」という被災地からのメッセージを NHK テレビで知ったことから、準備を整え翌日午後には 600 リットルの「飲料水」を地震で半壊した熊本城下に設けられた「救援物資センター」にお届けし感謝された。その際に寄った「熊本市役所」では、守衛さんから「先ほど、神奈川の赤十字さんが救急車で見えましたよ。」と親しく声を掛けられた。

「3.11」から一か月後の 4 月 11 日には「たい焼き隊」としてボーイスカウト仲間と共に石巻市女川町役場を訪問し、庁舎内のバス車庫をお借りした際、職員から「被災当日、町民に配る夜食が無く、引き出しにあった柿の種を一つずつお配りした。」とその惨状お聞きしたことから、その後「たい焼き支援」は「熊本地震」等も含め、32,000 枚となった。

現在、地方の災害は続出しても、私たちの地域に大きな災害が無い。過去「阪神・淡路」、「東日本」、「熊本」、「北海道」等の大災害は教訓とならず、人口過密に加え高度化した都市構造は想像を絶する「超巨大被害」に繋がると思う。特に「公助」、「共助」への期待度は薄く頼りになるのは「自助」である。「大災害でライフラインが停止しても 10 日間はおにぎりを求めない家庭の備え」を現実の「災害」と同時進行することで理解できると思う。



ホームページをご覧ください！

「[栄防災ボラネット](#)」で検索してください。

横浜栄・防災ボランティアネットワークへの連絡は
栄区社協：TEL 045-894-8521
FAX 045-892-8974